

マルク・ブロック(1886-1944)

二つの世界大戦の歴史家・証言者

エリック・ブノワ

(ボルドー・モンテーニュ大学)

訳：中里 まき子 (岩手大学)

——彼は真実を愛した (*Dilexit veritatem*)

1. 問題提起

マルク・ブロックについて話す前に、本日の問題意識を少し掘り下げてみたいと思います。

本シンポジウムの主題「証言の時代とそれ以前」はまず、アネット・ヴィヴィオルカの著書『証言者の時代¹』を想起させます。「証言者の時代」とは、ナチスの強制・絶滅収容所の発見と、生き残った人々の証言や犠牲者たちが残したテキストとともに始まった時代のことです。そして本シンポジウムの主題は、第二次世界大戦に続くこの「証言者の時代」と、それ以前になされた証言とを対比するよう私たちを導きます。

私は近現代に関して、証言の三つの時代区分を見出すことができます。第一の時代はフランス革命によって始まります。そこには革命期の証言（とりわけ恐怖政治の犠牲者によるもの）と、19世紀を通して書かれた革命に関する証言が含まれます²。

第二の時代は1914年に、第一次世界大戦とともに始まります。戦時下の兵士による証言（塹壕で書き込まれた手帖、前線から送られた手紙）や、戦後になってから、戦中の検閲やプロパガンダ、政府の公式発表に対して、生きた経験の真実を証明あるいは復元するためになされた兵士たちの証言があります（モーリス・ジュヌヴォワは1916年から1921年に、後に『1914年の人々』に収録されることになるテキストを刊行しました）。

第三の時代は第二次世界大戦によって始まります。戦時下に、日記などのテキストが書かれました（そのうちいくつかは戦後に出版されます）。そして、強制・絶滅収容所からの生還者たちは、プリーモ・レーヴィが言う「〈他者〉に語ることの欲求³」を抱きます。あるいは、1947年にロベール・アンテルムが著書『人類』の序文で述べたように。「私たちは語ることを望んでいた。ついに話を聞いてもらうことを。[...] 私たちは、記憶を、生々しい経験を持ち帰っていた。それをありのままに語りたいたいという熱烈な欲求を持って

¹ Annette Wieviorka, *L'Ère du témoin*, Librairie Arthème Fayard, 1998, réédition en Collection « Pluriel », 2013.

² シンポジウムの主催者である中里まき子の示唆により、この時代のいくつかのテキストを知ることができた。フランス革命期の証言としてはロラン夫人『回想記』（1793年）を、19世紀に書かれた証言としては、1794年にギロチンにかけられたコンピエーニュ・カルメル会修道女たちの生き残りである受肉のマリー修道女の手記を挙げるができる。

³ Primo Levi, *Si c'est un homme* (Préface, janvier 1947) [1958], Julliard, 1987, Collection Pocket, p. 8.

いた⁴」。アネット・ヴィヴィオルカが指摘するように、「証言者の時代」は 1945・46 年のニュルンベルグ裁判とともに幕を開けます。この裁判に、1961 年のエルサレムのアイヒマン裁判が（他にも多数の裁判が）続きます。さらにその後、他の同様の試み（方法は異なりますが）とともに、1985 年公開のドキュメンタリー映画『ショアー』のためにクロード・ランズマン監督が収集した証言が続きます。

今までに盛岡で開催されたシンポジウムにおいて、私は、この第三の時代の経験から生み出された証言について講演する機会を得ました。その際、アンネ・フランク、エティ・ヒレスム、エレヌ・ベールによって戦時下に書かれた日記⁵や、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所のユダヤ人特務班員たちが収容所の土に埋め、戦後に発掘された文書⁶を検討しました。これらの証人たちは、自分自身が殺される前に書きました。彼らは生き残りませんでした（しかし彼らのテキストは生き延びました）。このことにより彼らには、ロベール・アンテルムやプリーモ・レーヴィのように生還者として、生き延びた証人として戦後に執筆した証言者たちとは異なる、特別な地位が付与されます⁷。

これら三つの時代に共通する特徴や傾向を指摘することができます。証言者は、自ら死すべき運命にある場合でも、生き残りとして語る場合でも、何より死者の記憶のために証言することを望みます⁸。意識しているか否かによらず、歴史的トラウマの後で、証言者は証言することによって個人としての自分自身の記憶と、トラウマを受けた共同体の記憶の再構築を試みます（革命期の恐怖政治の犠牲者たち、第一次世界大戦の兵士たち、ナチスに虐殺されたユダヤ人たち）。証言者はまた証言によって、ある真実を証明あるいは復元すること（第一次世界大戦の検閲、プロパガンダ、政府の公式発表に抗して、ショアーの否定論の試みに抗して）、そして、歴史の言説の確立に貢献することを望んでいます

⁴ Robert Antelme, *L'Espèce humaine*, Gallimard, 1957, Collection Tel, 1999, p. 9.

⁵ シンポジウム「世界大戦期の文学創作と女性たち」（岩手大学、2013 年 6 月）において行った講演が、論文「バラック小屋の考える心：ゾフィ・ショル、エレヌ・ベール、エティ・ヒレスム、アンネ・フランク、その他の女性たち」として書籍『トラウマと喪を語る文学』（中里まき子編、朝日出版社、2014 年、p. 205-224）に収録された。

⁶ シンポジウム「無名な書き手のエクリチュール」（岩手大学、2014 年 12 月）において行った講演が、論文「未知の奥底で書く：アウシュヴィッツに残された手記」として書籍『無名な書き手のエクリチュール』（中里まき子編、朝日出版社、2015 年、p. 31-64）に収録された。

⁷ エミール・バンヴェニストはラテン語の二つの語が証人 *témoin* を意味すると指摘している。（証言することが可能な出来事を）生き延びた人を指す *superstes* と、「二人の当事者がいる事件に〈第三者 *tiers* (*ter-stis*)〉として立ち会う人」という意味の *testis* である（*Le Vocabulaire des institutions indo-européennes, volume 2 (Pouvoir, droit, religion)*, Éditions de Minuit, 1969, p. 277）。

⁸ クロード・ランズマン監督映画『ショアー』は次の引用から始まる。「私は彼らに永遠に滅びない名を与えよう」（イザヤ書 56,5）。それはまたジェルメーヌ・ティヨンが「三つの『ラーフェンスブリュック』への前書き」で述べたことである。「私は喪に服していた。そして私はこの手つかずの記憶の集積を活用して、私たちが喪った人々からこれらの記憶が保ち続けているものを救い出そうとした。少なくとも、彼らの唯一の墓である彼らの名を」（Germaine Tillion, *Ravensbrück* [1946, 1972], Seuil, 1973 et 1988, Collections Points Histoire, p. 11）。

(証言は歴史家にとっての参考文献となりえます)⁹。さらに証言者は、裁判の構造に基づいて語ります。裁判の構造といっても、暗示的な場合もあります。例えば、恐怖政治期の革命裁判の犠牲者たちは、彼らが受けた糾弾の構造を逆転させて、それを歴史の審判の舞台に移し替えます。第一次世界大戦の兵士たちは、歴史の裁きに直面した政治家たちの責任を立証するために証言します。また、証言に見られる裁判の構造が明示的である例として、第二次世界大戦に続く裁判や、加害者への処罰と被害者への賠償や謝罪を確定するあらゆる場合が挙げられます(しかし、犠牲者が死亡している場合やショアの生き残りのことを考えるとき、この「賠償」という言葉が嘲弄的であることに気づかされます。償いえないことに対するどんな賠償がありえるでしょう)。

三つの時代に共通するもうひとつの特徴は、それぞれの時代が、前例のない、根源的に新しい出来事によって開始されたことだと思います。第一の時代はフランス革命、とりわけ恐怖政治によって。第二の時代は第一次世界大戦によって。第三の時代は第二次世界大戦とショアによって。そしてまさしく端緒となった出来事の根源的な新しさゆえに、三つの時代はそれぞれに、他の二つの時代にはない特異性を備えています。21世紀初頭を生きる私たちは、第三の時代、アネット・ヴィヴィオルカが「証言者の時代」と呼ぶ時代に属します。この時代の端緒となった出来事、ショアは、先行するいかなる出来事とも完全に次元が異なります。ここで、これら三つの時代の証言テキストの読者、受容者としての私たちの状況に関するある疑問が浮上します。20世紀末から21世紀初頭の読者である私たち、第二次世界大戦とショアの証言の時代である第三の時代に属する私たちは、先行する二つの時代の証言を、第二次世界大戦後の問題意識に基づいて読んでしまう傾向がないのでしょうか。そうした問題意識は、19世紀にも、第一次世界大戦後にもまだ存在しなかったものですが、現代の私たちの期待の地平から、先行する時代の証言を遡及的に照らし出すことができます。そこには、先行する二つの時代の証言について私たちが歪んだ読解をしてしまう危険性があると同時に、現代の問題意識によって過去のテキストを照らして、読解をより豊かなものにできる可能性があります。こうした受容に関わる諸問題が重要であると思われるのは、時代に関わらず、証言者が常に自分の言葉の潜在的な受け手について明確な言及をしているからです。絶望的な状況で書いている証言者は、その言葉がいつか受け手に届くことがあるか自問します。また、おそらく読者や聴衆を得られるとわかっている生還者は、自分の発言がどのように受け取られ、理解されるかを自問します。

私はこうした多様な問いに完全に答えることはできないでしょうが、それらのある作家の著作とともに探求したいと思います。彼は、多かれ少なかれ証言の三つの時代に関わり、二つの世界大戦の目撃者となり、その際の自身の経験について証言を書き、20世紀フランスの最も優れた歴史家のひとりであったばかりか、まさしく証言の理論家でもありました。本講演の題材として相応しいこの作家の名はマルク・ブロックです¹⁰。

⁹ この真実への配慮は、アンリ・グリフェの著書『歴史において真実を打ち立てるさまざまな証拠に関する論説』(1769年)が示唆するように、革命前にも見られた(Carlo Ginzburg, *Un seul témoin* [*Unus testis*, 1992], Bayard, 2007)。

¹⁰ マルク・ブロックのテキストのうちいくつかを次の著作集から引用する。Marc Bloch, *L'Histoire, la Guerre, la Résistance*, Gallimard, Collection Quarto, 2006。以下、本書をHGRと略記する。

2. マルク・ブロック——二つの世界大戦の証言者

まず、いくつかの伝記的事項を確認しましょう。1886年に生まれたマルク・ブロックは、数年だけ19世紀を生きました。彼が教育の大部分を受けたのは1914年より前でした。ウルム通りの高等師範学校に1904年に入学し、1908年に歴史学の上級教員資格試験に合格します。1914年8月に動員され、第一次世界大戦の間中、前線と塹壕を経験します。この数年間に『戦争の手帖』と『戦争の回想』を執筆します。1919年から、彼はストラスブール大学で教鞭をとります。また同年に結婚して、やがて6人の子供の父親になります。研究においては、中世フランスの農村の歴史を主たる対象とします。彼はとりわけ、1929年にもうひとりの歴史家リュシアン・フェーヴルとともに『経済社会史年報』を創刊したことで知られています。この雑誌は、20世紀フランスの史料編纂全体に影響を及ぼすことになる「アナール学派」の起源となりました（文献研究を特に重視することに加えて、アナール学派は、政治の動きや事件を中心とする従来の歴史を超越して経済、社会、文化の歴史へと向かうことを推奨します）。ストラスブール大学での17年間の後、マルク・ブロックは1936年にソルボンヌ大学の教授になります。1939年に志願して動員されると、彼は軍のガソリンを管理する責任者のひとりになり、前線に留まります。そこで彼は、機能不全に陥ったフランス軍を目の当たりにします。1940年のフランスの敗戦後、同年7月から9月まで彼はある「証言」（これが初めに考えられた書名でした）を執筆し、それは戦後に『奇妙な敗北：1940年の証言』として出版されました（現在、この著書によってマルク・ブロックは最も知られています）。マルク・ブロックはユダヤ人ですが、ヴィシー政権がユダヤ人を大学教育から排除するべく発令した1940年10月の政令の免除対象とされた10人のユダヤ人教授に選ばれました。彼はまず、クレルモン＝フェランまで退避したストラスブール大学に、続いてモンペリエ大学に配属されました。しかし、1942年11月にドイツ軍がフランス南部に侵攻すると、大学を去ることになります。徹底した共和主義者としてすでに対独レジスタンス運動に与していた彼は、そのときリヨンのレジスタンス組織「フラン＝ティールール」に参加し、やがてその幹部になります。1944年5月8日にナチス・ドイツの秘密警察ゲシュタポに逮捕され、同年6月16日にドイツ人によって銃殺されます。

マルク・ブロックは、証人 *témoïn* という言葉の二つの意味において兩次世界大戦の証人であったと言えます。まず、兵士として二つの戦争を経験したため、目撃者という意味での直接の証人として。また、二つの戦争を証言する文章を書いたため、出来事の証言者として。レジスタンス活動家でありユダヤ人であった彼は——彼の逮捕後、占領ドイツ軍当局の電報は「ブロックという名のフランス系ユダヤ人¹¹」と呼んでいます——、その死に

¹¹ 先述の著作集巻頭の伝記において引用されている。Marc Bloch, *L'Histoire, la Guerre, la Résistance*, Gallimard, Quarto, 2006 (HGR, p. 74).

よって、ナチスに殺害されたレジスタンス活動家たち、そしてナチスに絶滅させられたユダヤ人たちの双方に属するのです。

3. マルク・ブロック——証言の理論家として(1914年)

マルク・ブロックに関して興味深く思われるのは、歴史家として証言を理論化し、歴史家が証言とどう関わるべきかを述べた文章を自らの証言テキストに添えていることです。それは第一次世界大戦前に遡ります。実際、開戦の3週間前、1914年7月13日に、マルク・ブロックは高校生たちの前で学年末の講演「歴史批判と証言の批判」(HGR, p. 99-107)を行います。この講演は、1914年より前になされた証言と、マルク・ブロック自身が後に書くことになる証言、そしてもっと後の時代の証言についても、私たちの読解をより豊かなものにしてくれます。

マルク・ブロックはこの講演の冒頭で、証言を介してしか接することのできない過去の出来事に対する歴史家の立場を語っています。

ご存知のように私は歴史学教師です。過去は私の教育の材料です。私は自分が立ち会っていない戦闘を物語ります [...]。これはすべての歴史家の状況です。過去の出来事に関して、私たちは直接的で個人的な知識を持ちえません [...]。過去の出来事については、それらが生起するのを見た人々の物語を介してしか何も知ることができません (HGR, p. 99)。

そこでマルク・ブロックは、歴史家の状況と予審判事の状況とを比較します。また、歴史学において彼が用いる「証言」という語は、法的な場におけるこの語と響き合います。「私たちは、過去に関する壮大な調査を担う予審判事なのです。裁判所にいる私たちの同業者のように、私たちは証言を収集します」(ibid.)。

1914年からすでにマルク・ブロックは、歴史の言説の場と、裁判の言説の場との類似を意識しています。彼にこの直感を与えたのは、フランス革命期とそれに続く時代に、恐怖政治の犠牲者たちが、自ら召喚された裁判の構造を反転させる形で証言を残したことでした。この直感はいくつかの年代にも暗示的に見出されます。この時期、第一次世界大戦の兵士たちは政治家たちを糾弾しようと試みました。さらにそれは、1945年以降、ニュルンベルグ裁判によって完全に明示的なものとなります。そもそも、1914年にマルク・ブロックが歴史学における真実の追求と法的な文脈における真実の追求との間に見出した類似は、数年前に行われ、彼が無関心ではいられなかった重要な裁判とも関わるようです。それはドレフュス事件です。

ですから講演の残りの部分においてマルク・ブロックは、真実を引き出すために証言を批判的に読むことの必要性とその方法とを論じます。

これらの証言については、寄せ集めて縫い合わせればそれでいいのでしょうか。もちろん違います。予審判事の仕事と書記の仕事を混同してはいけません。証人がみな誠実ではありませんし、彼らの記憶がいつも正確なわけでもありません。ですから、彼らの供述を無批判に受け取ってはいけません。誤りや嘘から僅かな真実を引き出すために […]，歴史家たちはどうすればいいでしょう。語りの中の真実，虚偽，本当らしいことを見分ける技術を歴史批判といいます（HGR, p. 99-100）。

歴史家の第一の義務は証人の身元を特定すること，「彼の証人を喚問すること」です。「歴史家は過去の出来事を語ります。彼はそれを見ていません。彼は証人に依拠して語ります。そのための証人を彼は任命しなければなりません」（HGR, p. 100）。

マルク・ブロックは続いて、ある出来事に関する証言が矛盾する場合について論じます。例えば、1848年2月25日に二月革命を引き起こした最初の砲弾を誰が放ったかという問題に関して。「証人の一部は兵士であったと言い、一部はデモ隊であったと言います」（HGR, p. 101）。そして「ワーテルローの戦いを語るにはたくさんの方がいます」（HGR, p. 103）。そのことはスタンダール、ユゴー、トルストイによって示されています。

マルク・ブロックはまた、もっと微妙な、「ある出来事について二人の証人が同じ証言をしている」場合について次のように述べます。「経験を積んだ歴史家は警戒して、二人のうちひとりが、もうひとりの証言を反復しているだけではないかと自問します」（HGR, p. 101），あるいは二人とも、第三の情報源（かつて存在したが消失した）に依拠しているのではないかと。マルク・ブロックは事例のいくつかをナポレオン戦争に求めています。この戦争は、本講演の冒頭で述べた証言の時代区分における第一の時代に含まれます。

マルク・ブロックにとって証言とは、完全に真実でも完全に虚偽でもなく、常に真実と不正確さが混交したものです。「いくつかの点について正確であろうとしても、証言に間違いがまったく含まれないということはありません。悪い証人というのはほとんどいません。不完全な供述であっても、有用な情報を含むことがあります」（HGR, p. 103）。

ですから1914年7月13日の講演においてマルク・ブロックは、証言が含みえる欠陥を強調します。「歴史家は予審判事と同様、証人を前にして二つの問いを持ちます。証人は真実を偽装しようとするだろうか。もし真実を再現しようとするなら、それを達成できるだろうか」（HGR, p. 104）。その理由は次のように述べられます。「すべてにおいて完全に正確な証言は稀です。二つの欠落を考える必要があります。記憶の欠落と注意力の欠落。私たちの記憶は壊れやすく不完全な道具なのです」（HGR, p. 105）。というのも、「証人が真実を好むとしても、その記憶がいかに忠実であっても、彼には弱点があることでしょう」（HGR, p. 103）。1914年の講演の最後で、「証言の批判」（HGR, p. 107）の基礎が次のように規定されます。「複数の証言を相互に比較することによって真実を引き出すことができます」（HGR, p. 106）。

この真実と不正確さの混交は「戦闘に参加した将校による描写」（HGR, p. 103）にも見出されるようです。そしてマルク・ブロック自身、1914年と1940年に出兵して戦闘を描写することになります。後に自ら語り手となったとき、マルク・ブロックがすべての視点

と、特に自分の視点の相対性を意識していて、それでもできる限り客観的かつ誠実であろうとしたことは明らかです。

マルク・ブロックは確かに 1914 年 7 月 13 日の講演の冒頭で「私は自分が立ち会っていない戦闘を物語ります」（HGR, p. 99）と言っていますが、彼はすぐに、自分が立ち会った戦闘について語る機会を得ることになります。証言の理論家であり歴史家である彼は、「実証的な方法論の入れ子構造¹²」を形成しながら、自ら証言を書きます。

4. マルク・ブロックの『手帖』と『回想』(1914-1918)

第一次世界大戦開戦後の 1914 年 8 月 1 日から 11 月 15 日までほぼ毎日、マルク・ブロックは彼の移動や行動を示しながら手帖をつけていました（HGR, p. 177-185）。1914 年 9 月 9 日と 10 日のラルジクール近郊の戦闘についてはより詳細な記述が含まれます（HGR, p. 181）。大戦初期の数ヶ月に関するこの覚書は、1915 年初頭の療養中に、より発展させた形で文章化されます（HGR, p. 119-163）。『手帖』から『回想』へとテキストの分量は大幅に増えます。このことは、簡単なメモでしかなかったものを完全な文章へと練り上げる過程において拡張があったことを意味します。書き手は次のように執筆の意図を述べます。「現在はこれほど鮮明で生き生きしている記憶の色彩を、時間が消し去ってしまう前に定着させること」（HGR, p. 119）。この言葉からは、書き手の執筆目的が個人的なもので、必ずしもこの証言を読む受け手を求めてはいないように思われます。しかし、書かれた文章の格調、すなわち（散文ではあるが時に詩的でもある）入念かつ文学的な文章の質は、書き手が多少は意識的に、この証言がいつか他者によって読まれえると考えていたことを排除しません。そのことは、（どの読者のためにか？）彼が明確にしている執筆意図からも感じられます。

私は全てを書き留めはしないだろう。忘却の価値を認めることも必要である。しかし、私が経験したばかりの驚異的な 5 ヶ月間を、私の記憶の気まぐれに委ねたくはない。私の記憶は、私の過去に対してしばしば、あまり適切とは思えない選別をする習慣がある。私の記憶は、面白みのない詳細を抱え込む一方で、どんな些細な特徴も私にとって重要であったイメージを消え失せさせてしまう。私の記憶が不適切に行う選別を、私は今、私の理性に託したい（*ibid.*）。

この数行に、記憶の不完全さについての歴史家の意識を読み取ることができます。そして最後の数語は、彼自身の証言にも内在する、「理性」を介しての「証言の批判」への気遣いを物語っています。

『手帖』から『回想』へと文章が練り直されたことは、マルク・ブロックが『手帖』において時にドイツ人を指す軽蔑語「ボッシュ Boches」を用いているのに、『回想』にはこ

¹² マルク・ブロック著作集に付されたアネット・ベッカーの前書きにある表現（HGR, p. XIII）。

の語が現れないことからわかります¹³。1914年に兵士マルク・ブロックが用いたこの語は、歴史家としての文章には現れないのです（ですから、1915年初頭に、マルク・ブロックはむしろ歴史家として1914年の『回想』を書き直していることがわかります）。それでも1915年に書かれた回想記は、実際に経験した人物による個人的な主観を排除しません。「私」の存在感は確かにありますし、マルク・ブロックは随所で彼の敏感な知覚や感情を表現します。「ああ、退却の過酷な日々。疲労、倦怠、苦悶の日々！」（HGR, p. 123）、「私はこの行程で辛い時間を過ごした」（HGR, p. 124）、「歓びで私の心臓が鼓動した」（HGR, p. 129）。これはやはり主観的で個人的な視点からなされた私的証言なのですが、主観的かつ個人的な証言だからこそ、歴史家にとって客観的な価値を持つのです。このエクリチュールに、複数の物語論的な水準を見出すことができます。出来事の行為者としてのマルク・ブロック、経験した出来事の見撃者としてのマルク・ブロック、書き手（語り手、証言者）としてのマルク・ブロック、さらに、自ら作成している文書を読む歴史家マルク・ブロック。そして書き手としての彼は、自分の知覚の不確かさや欠落を隠しません。「私たちはどれだけの時間この窪地にいたのだろう。[...]まったくわからない」（HGR, p. 126）、「私は自分で見たことしか語るができない。当然ながら私が経験できたことの範囲はとても狭い」（HGR, p. 160）。

1914年の『回想』を語るマルク・ブロックは状況の分析家でもあります。「皆と同様、私も、物資の用意と軍事訓練とがまったく不十分であったことを認めた」（HGR, p. 159）。このような分析は、より発展された形で、1940年の『奇妙な敗北』にも見出されます。

マルク・ブロックは1915年7月から1918年11月まで戦争の『手帖』を書き続けました（HGR, p. 193-252）。しかしその記述は極端に簡潔で、文章化されることはありませんでした。そうした記述は、クアルト版では、マルク・ブロックが戦時中に書き送った手紙を交えて収録されています。戦時中の手紙は、まずは私的に書かれたものでも、やはり証言とみなされます。

また、クアルト版はマルク・ブロックの『戦争の手帖』を、彼が戦場から持ち帰った約70枚の写真とともに提示しています。そこにも、記録することに対する歴史家の心遣いを感じます。しばしばマルク・ブロック自身によって題名と解説を付された写真もまた、彼について、他の兵士たちについて、土地について、生活環境についての証言なのです。そのうち数枚は塹壕で撮られています、もちろん戦闘中ではありません。また、前線ではなく「後方にて」（HGR, p. 187）、つまり少し安全なところで撮られたものもあります。そういった写真には、兵士たちがカメラの前でポーズをとっている点で技巧が感じられます。そこには記録することへの意志がありますが、まさしく撮影の状況によって少し歪められてもいます。

私はここまで、1914年7月にマルク・ブロックが証言を前にした歴史家に向けて推奨した批判的態度をもって、彼自身による証言を読んでみました。そして、証言を証言たらしめようとする意図や、視点の相対性や不確かさ、欠落の意識、さらには証言が図らずも伝

¹³ マルク・ブロック著作集に付されたアネット・ベッカーの前書きにおいてこの指摘がなされている（HGR, p. XVIII-XIX）。

えているもの（写真撮影のためにポーズをとる兵士たちの精神状態）を見出すことができませんでした。

5. 1940年と『奇妙な敗北』

マルク・ブロックは1914年7月13日の講演で提示した「証言批判」の方法論を、1940年10月に『歴史家はなぜ、どのように仕事をするか』（HGR, p. 823-842）というテキストにおいて発展させます。実際のところこれは大学の講義の詳細な計画です。そこには1914年の講演の要素も見られますが、全体がもっと体系的に提示されています。第一部は「歴史の証言、その性質と証言の批判」（HGR, p. 826）と題されています。マルク・ブロックはそこでまず「歴史の証言の性質と限界」（HGR, p. 827）を、続いて「証言の分類」（HGR, p. 828）を提示しますが、「分類の第一原則」は「証言に内在する性質」です。「証言のうち一部は意図的になされている」（それらは〈叙史的資料〉と呼ばれることがある）、そして「それ以外は意図せずに情報提供している」（先人たちが無意志的に残した文書や品物のことである）という区別のことです。今私たちが考えている証言とは前者、すなわち、証言するために意志的かつ意図的になされた叙述です。「分類の第二原則」（HGR, p. 830）は第一原則と重なる部分もあるのですが、「書かれた証言」であるか、「品物や考古学的な証言」であるか、という区分です。続いてマルク・ブロックは「証言の継承」（*ibid.*）に触れた後、とりわけ「証言の批判」を詳述し、そこでは「偽の証言」（HGR, p. 831）、「虚偽を含む文書」（HGR, p. 832）、「誤り」（HGR, p. 834）などを区別する方法が示されます。マルク・ブロックは次に言語学を援用して「証言の理解」（HGR, p. 835）と呼ぶものに触れ、続いて「統計の批判」（HGR, p. 836）という特殊な場合を検討します。この講義計画の第二部は「証言の解釈」（HGR, p. 838）と題されていますが、マルク・ブロックの記述はより簡素なものとなります。しかしそこには、歴史学を他の人文科学諸分野へと、とりわけ社会学や経済学、宗教学、芸術、そして心理学へと開こうという意志が読み取られ、それはアナール学派の精神に適合しています¹⁴。

この1940年10月の講義計画の前、1940年7月から9月にかけて、マルク・ブロックは彼の代表作となる『奇妙な敗北』（HGR, p. 519-653）を書いていました¹⁵。当初、マルク・ブロック自身によって考えられていた表題はまさしく『証言』でした。1946年、作者の死後にこの本が出版された時、『証言』という題名の他の本がすでに出版されていまし

¹⁴ 少し後で書かれた『歴史のための弁明』においてマルク・ブロックは再び、意志的な証言が意図せずに伝えてしまうものを、歴史家は看破するよう努めなければならないと述べる（例えばサン＝シモンが『回想録』において意図的に与えている情報の陰に、私たちは「太陽王の宮廷に対する大領主の考え方」（HGR, p. 893）を見出すことができる）。

¹⁵ 『奇妙な敗北：1940年に書かれた証言』については次の刊本から引用する。Marc Bloch, *L'Étrange défaite. Témoignage écrit en 1940*, Gallimard, Collection Folio Histoire, 1990. 以下、本書をEDと略記する。

た。そのためマルク・ブロックの著書は『奇妙な敗北：1940年に書かれた証言』という題名で出版されたのです。

第一次世界大戦の『手帖』と『回想』は、まずは個人的な用途のために書かれましたが、1940年の『奇妙な敗北』は最初から公開するために構想され、後世のために書かれました。『証言』という当初の題目は受け手の存在を想定しています。この著書の初めの数行は、受け手に関する危惧を語っています。「これらのページはいつか出版されるだろうか。私にはわからない」(ED, p. 29)。この受け手をめぐる危惧は、第二次世界大戦中に書かれた証言の多くにおいても、多少の苦悶を伴いつつ表明されています(アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所においてユダヤ人特務班のメンバーによって地中に埋められた文章は、この問題について特に雄弁に語っています)。マルク・ブロックは希望を持っています。「遅かれ早かれ、フランスに再び[...]思考と判断の自由が開花する日が訪れると私は確信している」(*ibid.*)。第二次世界大戦の多くの証言者のように、マルク・ブロックは戦後に彼の文章を読むであろう人々のために書いています。1940年5月の敗北のわずか数週間後、マルク・ブロックは解放後の時代に向けて書いたのです。ですから冒頭の数行においてすでに、受容の協約、つまり未来の受け手との絆を結ぼうとしています。「その時、隠されていた書類は開かれるだろう[...]。そしておそらくそれらを開く研究者たちは、もし彼らが解明するすべを知っていたら、この1940年の調書のページをめぐることに利益を見出すだろう」(*ibid.*)。マルク・ブロックが言及する「研究者」とは歴史家のことですが、「調書」という語が数行前の「証言」という語とともに用いられると、私たちは直ちに裁判の構造——歴史の大法廷——に導かれます。

マルク・ブロックはこの本の第一部を「証言者の紹介」(ED, p. 29)と題します。証言する前に、証言者は、個人としてどの視点から語るのかを客観的に示す必要があります。それは歴史でも裁判でも不可欠な手続きであるように思われます。「証言者には身分証明が必要である。私が見たものをまとめる前に、私がどのような視点からそれを見たのかを述べるべきである」(ED, p. 30)。ここで提示されるのは、主観的な視点がいかなるものであるかを客観的に記すという課題です。したがってマルク・ブロックの本の冒頭は、彼自身の紹介に充てられます。

マルク・ブロックはまず、歴史家として自己紹介します。「歴史を教える、歴史に関する執筆をすること。34年間程、それが私の仕事である。この仕事のために、さまざまな時代の多数の文献を繙き、真実と虚偽とを見分けるよう最善を尽くした」(ED, p. 30)。ですから、文献に批判的な歴史家の立場は、マルク・ブロックが自ら執筆する際に(真実に最も近づこうという配慮とともに)採用するものであり、同時に、彼の著作を読む歴史家たちに対して暗黙のうちに期待するものです。「こうした習慣的な批判と観察、そして願わくは公正さをも、私がささやかながら当事者となった悲劇的諸事件の研究に活用しようとした」(*ibid.*)。この言葉は、マルク・ブロックが出来事の当事者、観察者、そして語り手という役割に加えて、「研究」という語が示すように解説者の役割をも兼ね備えていることを伝えています。

この著書『奇妙な敗北』の第一部は主として、1939年秋以降にマルク・ブロックが軍隊で体験した出来事の語り充てられ、とりわけ1940年5月10日から7月4日までのフランス軍の敗戦が詳述されます。彼は自分が経験したことを語りつつ、起きたことの完全な展望を得るためには、「他の証言に頼る」(ED, p. 54) 必要があるとし、その理由を述べます。「誰も、全てを見た、全てを知ったなどと主張することはできない。各自が率直に、言うべきことを言いますように！ 真実はこれらの一致した誠実さから生まれるのだから」(ibid.)。

この本の第二部は「敗北者の証言」(ED, p. 55) と題されています。フランス語原題にある *déposition* という語は多義的です。そこにはまず、敗戦のために武器を「下ろす」ことになった者たちへの暗示があります。それはまた裁判における証人の「供述」、特に検察側の証人の「供述」という意味で使われる語でもあります。この第二部は次のように始まります。「私たちは途方もない敗戦を喫したところだ。誰が悪いのだろう」(ibid.)。責任を迫及しようとするマルク・ブロックは、歴史家特有の分析的態度を示します。彼が特に看破するのは「軍司令部の無能さ」(ibid.) です。それを彼は、軍のガソリンを管理する職務において目撃することができました。自分自身をも「軍の官僚」(ED, p. 38) とみなしつつ、マルク・ブロックは、「書類作りの苦行」(ED, p. 89) に「人的資源を浪費」(ibid.) していた「軍隊の官僚主義」(ibid.) を繰り返し非難しています。「書類作りの偏愛」(ED, p. 126) , 「官僚主義の長い年月」(ED, p. 127) , 「私たちの軍隊の官僚主義」(ED, p. 128) , さらに「部署同士のライバル関係」(ED, p. 129) にも触れて、これら全てが「フランスの戦略準備における欠落」(ED, p. 150) と、ドイツ軍の迅速さに対するフランス軍の効率の悪さを説明するとしています。ところで、マルク・ブロックの認識がいつも否定的なわけではないことから、彼が中立であろうとしたことがわかります。「こうした脆弱さの一方で、同じこの世界において、どれほどの勇気ある行為が見られたことか。この対照こそが、適切な陰影をつけて歴史を語ることを非常に困難にする」(ED, p. 138) 。

この本の最終章である第三章は「フランス人の良心の検討」(ED, p. 159) と題されています。マルク・ブロックは「公正であるためには、兵士の証言がフランス人の良心の検討にも及ぶべきである」(ibid.) としていて、その検討を彼自身も免れることはできません。なぜなら、「過ちの責任は全ての市民にある」(ibid.) からです。それに、マルク・ブロックが非決定論的歴史学の支持者であったとしても、彼は原因を求めますし、「最も遠い因果関係の分岐点まで遡る」(ED, p. 160) ことを望みます。そうした原因を、彼はやはりフランス社会の「官僚主義」(ED, p. 165) と「お役所的締め付け」(ED, p. 172) , そして特に「ナチズムを予期できず」(ED, p. 203) , 「為すに任せる」(ED, p. 204) ことになった知的無分別に求めます。

この第三章においてマルク・ブロックの思考は「この総括を読むであろう子供たちや、いつかこれを目にするであろう未知なる友人たち」(ED, p. 160) へと向かいます。改めて、受け手に関する心遣いが語られます。「私はこの文章を読む人たちのことを考える」(ED, p. 205) 。だからこそ、この本の最後の数ページは「私たちの国と文明の未来」

(ED, p. 206) へと開かれています。「私たち国民を突き動かすバネは無傷で、再び飛び上がる用意がある」 (*ibid.*)。フランス史上、そして人類史上、最も絶望的な時代であるこの時でも、マルク・ブロックは希望を持ち、起きたばかりのことに関する証言を未来への希望につなげようとしています。彼は解放の日を思い描いていますが、その前にこの世を去ります。

*

証言を研究するための理論や証言の実践であるマルク・ブロックのテキストから浮かび上がるのは、知的な誠実さへの配慮です。彼は文章においても行動においても、この真実への配慮を示しています。1914年7月13日の高校生のための講演の最後で、彼は、その批判的な方法論において「真実へ至る道筋のひとつ」 (HGR, p. 107) を示しました¹⁶。この真実への配慮は、本講演の導入部で挙げた証言の三つの時代に共通する導きの糸です。それは今、このフレイク・ニュース¹⁷の時代を生きる私たちにとって特に重要なものです。マルク・ブロックは真実を愛しました。1941年3月18日に書いた遺言において、彼は、ルナンの言葉である (HGR, p. 250) 「彼は真実を愛した (*Dilexit veritatem*) 」が自分の墓石に刻まれることを望みました (HGR, p. 813)。

¹⁶ 正しく事実関係を解明することへの専心を、強制収容所の生き残りである別の歴史家、厳密には民族学者のジェルメーヌ・ティヨンにも見出すことができる。とりわけ次の著書として刊行された瞠目すべき資料収集の仕事に。Germaine Tillion, *Ravensbrück* [1946, 1972], Éditions du Seuil, 1973 et 1988. ジェルメーヌ・ティヨンはこの仕事を CNRS の現代史部門を離れた後に行った。その時この現代史部門を指揮していたのは、1929年にマルク・ブロックとともに『アナール』誌を創刊したリュシアン・フェーヴルであった。マルク・ブロックと同様ジェルメーヌ・ティヨンにも、文献研究における厳密さが見出される。

¹⁷ マルク・ブロックが1921年に書いた「戦時下の虚報に関する歴史家の考察」 (HGR, p. 293-316) には今日的意義がある。